## **ILC Accelerator Overview**

#### **ILC** Accelerator **Higgs Factories** Far Future of ILC





・レイアウト





- 電子源
- 陽電子源
- 減衰リング(DR, Damping Ring)
- RTML (Ring To Main Linac)
- Main Linac
- BDS (Beam Delivery System)

			Baseline 500GeV Machine			L Upgrade	ograde Energy Upgrade	
							A	В
Center-of-mass energy	Е <sub>СМ</sub>	GeV	250	350	500	500	1000	1000
Collision rate	frep	Hz	5	5	5	5	4	4
Electron linac rate		Hz	10	5	5	5	4	4
Number of bunches	n <sub>b</sub>		1312	1312	1312	2625	2450	2450
Bunch population	nb	x10 <sup>10</sup>	2	2	2	2	1.74	1.74
Bunch separation	$\Delta t_{b}$	ns	554	554	554	366	366	366
Pulse current	I <sub>beam</sub>	mA	5.8	5.8	5.8	8.8	7.6	7.6
Main linac average gradient		MV/m	14.7	21.4	31.5	31.5		
Average total beam power	$P_{beam}$	MW	5.9	7.3	10.5	21	27.2	27.2
Estimated AC power	P <sub>AC</sub>	MW	<b>122</b> <sup>1)</sup>	121	163	204	300	300
RMS bunch length	σ <sub>z</sub>	mm	0.3	0.3	0.3	0.3	0.25	0.225
Electron RMS energy sprea	∆p/p	%	0.19	0.158	0.124	0.124	0.083	0.085
Positron RMS energy sprea	∆p/p	%	0.152	0.1	0.07	0.07	0.043	0.047
Electron polarization	P_	%	80	80	80	80	80	80
Positron polarization	P+	%	30	30	30	30	20	20
Horizontal emittance	γε <sub>x</sub>	μm	10	10	10	10	10	10
Vertical emittance	γε <sub>v</sub>	nm	35	35	35	35	30	30
IP horizontal beta function	$\beta_{x}^{*}$	mm	13	16	11	11	22.6	11
IP vertical beta function	β*,	mm	0.41	0.34	0.48	0.48	0.25	0.23
IP RMS horizontal beam siz	$\sigma_{\star}^{*}$	nm	729	683.5	474	474	481	335
IP RMS vartical beam size	$\sigma^*_{v}$	nm	7.7	5.9	5.9	5.9	2.8	2.7
Luminosity	L	$x10^{34}/cm^{2}s$	0.75	1	1.8	3.6	3.0 <sup>2)</sup>	4.9
Fraction of L in top 1%	L <sub>0.01</sub> /L	%	87.1	77.4	58.3	87.1	59.2	44.5
Average energy loss	$\delta_{\text{BS}}$	%	0.97	1.9	4.5	4.5	5.6	10.5
Number of pairs/bunch crossing		x10 <sup>3</sup>	62.4	93.6	139	139	200.5	382.6
Total pair energy/bunch cro	ossing	TeV	46.5	115	344.1	344.1	1338	3441
1) 129MW for 250GeV mac	hine	2) TDR gives	s 3.6 (perhap	os typo)				

### **Beam Parameters**

- ILCのbeam parameterは基本的には
  - Damping ringの性能
  - 超伝導加速
  - beam-beam interaction
  - で決まっている
- そこで、この講義はbeam-beam interactionから始め、ビーム源にもどり、ビームに沿って最後にinteraction pointを説明する

## Luminosity

最適化すべき量はluminosityである

Number of events/sec =  $\mathcal{L}\sigma$ 

( $\sigma = cross \ section \ of \ the \ event$ )

$$\mathcal{L} = f_{rep} \frac{n_b N^2}{4\pi \sigma_x^* \sigma_y^*} \times H_D$$

- f<sub>rep</sub> beam pulseの繰返し周波数(5Hz)
- n<sub>b</sub> 1パルス内のバンチ数 (1312)
- N 1バンチ内の粒子数 (2x10<sup>10</sup>)
- σ<sub>x</sub>\*, σ<sub>v</sub>\* 衝突点でのtransverse beam size (~6nm, ~500nm)
- H<sub>D</sub> Luminosity enhancement factor

括弧内はILCの標準的な値

## Beam-Beam 相互作用

- バンチの衝突継続時間は数psecにすぎないが、相 手ビームの作る電磁場が非常に強いので、衝突の 間の
  - -ビームの変形
  - シンクロトロン輻射(Beamstrahlung)
     が重要な役割を演ずる。
- バンチ内部でのクーロン力は(ほとんど)無視できる。
   (電場の力と磁場の力の相殺)相手ビームのみ考えればよい

$$F = e[E + v \times B]$$
  

$$\approx e[E \pm v/c \times (v/c \times E)]$$
  

$$\approx e[1 \pm (v/c)^{2}]E$$

#### **Disruption Parameter**

- ビームの変形が小さい場合を考える
- Gaussian beam の中心付近では

$$\frac{d^2x}{dt^2} + \frac{4Nr_e}{\gamma}n_L(z_2)\frac{x}{\sigma_x(\sigma_x + \sigma_y)} = 0$$

軸に平行に入った粒子(x=x<sub>0</sub>, dx/dt=0)の場合、xの変化が小さければ

$$\left[\frac{dx}{dt}\right]_{final} \approx -\frac{2Nr_e}{\gamma} \frac{x_0}{\sigma_x(\sigma_x + \sigma_y)}$$

 これは、薄い収束レンズの効果と同じ。バンチ長とこのレンズの焦点距離 f<sub>x(y)</sub>の比を Disruption Parameter と呼ぶ

$$D_{x(y)} \equiv \frac{\sigma_z}{f_{x(y)}} = \frac{2Nr_e}{\gamma} \frac{\sigma_z}{\sigma_{x(y)}(\sigma_x + \sigma_y)}$$

D<~1ならビームの変形は小さい。ILCでは、D<sub>x</sub>=0.1~0.3, D<sub>y</sub>=25



• 規格化エミッタンスは加速してもかわらない(リウヴィルの定理)

## $\beta$ function

・加速器のある点でのビームサイズは、その点での関数 $\beta_x$ を使って  $\sigma_x(s) = \sqrt{\beta_x(s)\epsilon_{g,x}}$ 

• ビームがs=0の点で絞られているとき、その近傍(磁石のないところ)では、 $\beta_x$ は

$$\beta_x(s) = \beta_x^* + \frac{s^2}{\beta_x^*}$$
のように変化する

• したがって

$$\sigma_x(s) = \sigma_x^* \sqrt{1 + \frac{s^2}{\beta_x^{*2}}}$$

### 砂時計(hour-glass)効果

ベータ関数を絞りすぎると、焦点深度が浅くなって、luminosityが上がらない。限度は、



Luminosity を上げるには、バンチを短くすること、エミッタンスを下げることが必要。



#### Luminosity Enhancement

Dが大きい場合、クーロンカのため、幾何学的に求めたLumonosityより高 くなる。(Pinch Enhancement)



D<sub>v</sub>

しかし、Dが大きすぎると、Luminosityは小さな誤差に敏感になる。



### **Kink Instability**

- これは逆向きの2つのビームの系が不安定なためである。
   一般的にこれを、Two Stream Instability と呼ぶ
- ILCではほとんどの場合 D<sub>y</sub> ~ 25
- これはやや大きすぎ るが、feedback systemでがんばる



### Beamstrahlung

- 衝突中の相手ビームが作る磁場は数キロTeslaにおよぶ
- この磁場のための輻射を、Beamstrahlungとよぶ。

Power Spectrum

- この輻射は原理的に シンクロトロン輻射と同 じであるが、critical energy がもとの電子エ ネルギーに比べて無 視できないので、スペ クトルの形は異なる。
- これは、Sokolov-Ternov が求めたもの。



## **Upsilon Parameter**

Beamstrahlungのcritical energyは

$$\Upsilon \equiv \frac{2}{3} \frac{\hbar \omega_c}{E} = \frac{\lambda_e \gamma^2}{\rho} = \gamma \frac{2B}{B_c} = \frac{e}{m^3} \sqrt{\left| (F_{\mu\nu} p^{\nu})^2 \right|}$$
$$B_c = m^2/e \approx 4.4 \text{GTeslas}$$

Bの前のfactor 2は電場の寄与を考慮してもの

• Beam parameterで表すと

$$\Upsilon_{average} = \frac{5}{6} \frac{N r_e^2 \gamma}{\alpha \sigma_z (\sigma_x + \sigma_y)}$$

・ 電磁場のLorenz不変量として、このほかに  $F^{\mu\nu}F_{\mu\nu}/m^4, F^{\mu\nu}\tilde{F}_{\mu\nu}/m^4$ 

があるが、リニアコライダーではこれらは小さい

### エネルギー損失、光子数

• 電子1個あたりの平均光子数



 $\left\langle \frac{\omega}{E} \right\rangle = \begin{cases} 0.462\Upsilon & (\Upsilon \to 0) \\ 16/23 = 0.254 & (\Upsilon \to \infty) \end{cases}$ 



#### Flat Beam

- ・ 扁平にすると、同じ断面積で、電磁場を減らせる
- 分布を長方形とする
  - 幅w<sub>x</sub>, 高さw<sub>w</sub> 長さw<sub>z</sub>
  - 両脇および進行方向の境界の部分を無視する

≷

- Ey はほとんど y方向
- Gaussの定理により





### Flat Beam (2)

- ・したがって  $E_y \approx \frac{eN}{2\epsilon_0 w_x w_z}$ これはビームの高さによらない。
- 一方、luminosityは、1/w<sub>x</sub>w<sub>y</sub>に比例
- したがって、w<sub>y</sub> → 0 とすれば beamstrahlung の増加なしで luminosityがふやせる。
   (w<sub>y</sub> → infinity は砂時計効果のためダメ)
- Flat beamの利点•欠点
  - Damping ringのvertical emittanceが小さいことを生かせる
  - Final Fosusの色収差補正で、vertical planeに集中できる
  - 欠点は、vertical toleranceがきつくなること

## **Luminosity Scaling**

Luminosityの公式を、beamstrahlungを使って表現すると

$$\begin{aligned} \mathcal{L} &\approx C \frac{P_B}{E} \sqrt{\frac{\delta_{BS}}{\epsilon_{n,y}}} \times \sqrt{\frac{\sigma_z}{\beta_y}} \times \frac{H_D}{\sqrt{U_1(\Upsilon)}} \\ P_B &= E f_{rep} n_b N, \text{ : beam power/beam} \\ &= \eta P_{AC}, \quad P_{AC} \text{: AC power} \\ C &= \frac{1}{4\pi\sqrt{0.836r_e^3}} \\ \bullet & \sigma_z/\beta_y \, \text{lt} \, \sigma_z > \beta_y \, \mathcal{O}$$
場合1とする (hour-glass)

- $P_{AC}$ は社会的に、 $\delta_{BS}$ は物理実験上、限界がある
- Luminosityをあげるには
  - 電力効率を上げる
  - 減衰リングのvertical emittanceをさげる

# パルス構造

- $P_B = E x f_{rep} x n_b x N$
- $P_{B}$ をどのように  $f_{rep}$ ,  $n_{b}$ , N に分けるか
- ・もうひとつ、バンチ間隔 t<sub>b</sub>
- ・これはlinacのoptimization  $- ビームのパルス電流 I = eN/t_b$  $- ビームパルスの長さ n_b x t_b$
- バンチの長さ
  - これはlinacの最適化とはほとんど関係しない
  - 衝突点でのベータ関数 β<sub>y</sub>\* が追いつける範囲ででき るだけ短くする

基本的ビームパラメータ(baseline, 5Hz)

•	繰り返周波数	5Hz	•	水平エミッタンス	10 mm
•	パルスあたりバンチ数	1312	•	垂直エミッタンス	35 nm
•	バンチあたり粒子数	2x10^10	•	衝突点水平ビームサイズ	474nm
•	バンチ間隔	554 ns	•	衝突点垂直ビームサイズ	5.9nm
•	バンチ長	0.3 mm			





- 偏極ビームが要求される(>80%)
- あまり問題はない。レーザーのみ。





大森さん担当

陽電子生成の3つの方法

- Undulator法(ILC baseline で採用)
- Conventional Method(従来の方法)
  - 数GeVの電子を標的に当て、発生する陽電子を回収する。
  - これまでに頻繁に使われて、技術は確立されている
  - ILCへの応用上の問題点は
    - 標的が耐えられるか → OK (遅い運動標的試験中)
    - 発生する陽電子のエミッタンスがやや悪い → OK (DRの改良)
    - DRまでの輸送部分の設計ができていない
    - ・ 偏極陽電子が得られない
- Laser-Compton法 (将来の方法)

# **Undulator法**

- 数100GeVの電子ビームを磁石(undulator)により蛇行させると、数 10MeVの輻射を出す。これを標的に当てて発生する陽電子を回収する。
- 平面上の蛇行でなく、螺旋状の運動(Helical Undulator)なら、発生する輻射は円偏光し、偏極陽電子が得られる。



- 電子のエネルギーが低くなると急激に光子生成率がわるくなる
- であるが、偏極陽電子ができるという利点が強い

## ILCのBaseline設計 (undulator法)





- Undulator
  - 主電子リナック終端に置く
  - Helical, superconducting
  - 長さ~150m (偏極陽電子が必要な場合~230m)
  - K=0.92, λ=1.15cm, (軸上でB=0.86T)
  - beam aperture 5.85mm (直径)
- 標的はチタン合金の回転型
- 陽電子回収には、Flux Concentratorを用いる
- 400MeVまでは常伝導加速



#### **Undulator Radiation**

• 電子軌道上の2点からの輻射が干渉する条件

$$c\frac{\lambda_w}{v_z} - \lambda_w \cos\theta = n\lambda$$



• これより

$$\lambda = \frac{\lambda_w}{2n\gamma^2} \left[ 1 + K^2 + \theta^2 \gamma^2 \right]$$

ILCでは E<sub>beam</sub>=150GeVのとき、K=0.92



### **Positron Polarization**

- photonのエネルギー・角度とpolarizationの間に相関がある
- 捕捉効率はエネルギー・角度によるので、生成された陽電子は自然に偏極している(30%程度)
- photonの角度とpolarizationとの相関を利用して、大角度のphotonをcollimatorで 捨てれば、より高いpolarizationが得られる(~60%程度まで)
- Collimatorは設計中(baselineには入っていない)





## 標的

- チタン合金の車輪(直径1m)を、2000rpm(縁辺速度 100m/s)で回す
- これは1msの間の熱の集積を防ぐため
- ・ 円盤でなくスポーク形状になっているのは、磁場中の回転
   で発生する eddy currentを減らすため





Cockcroft Insituteでeddu current試験中の回転標的。 実際の標的は真空中で回 転させる。

# <mark>標的 (2)</mark>

- 真空中(直後に加速空洞が ある)で100m/sで動く標的が 必要
- LLNLで2社からの Ferromagnet sealをつかって 試験中
- 十分な成果は上がっていない
  - Outgassing spikes still being observed
- More works needed
  - market products don't work
- 今年(2014年)5月の米国P5 reportのおかげで、予算が つく可能性がたかくなった



## **Positron Capture**

- Captureはflux concentratorをbaselineとする
   これはRDRから変更なし
  - SB2009ではQWTを採用しかけたがこれはヤメ
  - ただし、max fieldは5T→3.5Tに下げる (simulationの結果、これで十分)





- Undulatorをリナッ • ク終端におくため、 陽電子生成率は、 電子エネルギー (=実験の重心系 エネルギーの半 分)による
- 150GeV以下では、 • 陽電子が不足す



## 低エネルギー運転

- E<sub>CM</sub><300GeVでは陽電子数が不足する</li>
- E<sub>CM</sub>=250GeVまでなら
  - Undulatorの長さを147m→230mにのばせば足りる(スペースは もともと偏極陽電子のために用意してある)
  - 標的へのloadはOK(photon energyが下がること、photonの発 散角1/γが大きくなりスポットサイズが広がること)
- E<sub>CM</sub> < 250GeVではこれでも不足</li>
  - 電子リナックを10Hzで運転する
    - ・ 5Hzは陽電子生成(使用後電子ビームのdump lineが必要)
    - 5Hzは衝突実験
    - Klystronの10Hz運転はOK
    - リナックは交互にエネルギーの違う粒子が通る
    - 軌道補正は衝突ビームに合わせる
  - Damping Ringは、100msecでダンプさせる(陽電子側も)
    - Damping wiggler、およびRFの増強が要る(Baselineに含まれている)
  - Z-pole, W pair threshold, E<sub>CM</sub><250GeVのscanは必要か?
#### Undulatorによる電子ビームのDegradation

・ ピッチ  $\lambda_w$  長さ  $L_w$  強さ  $K_w$  のwiggler 中での平均エネルギーロスは

$$-\Delta E = \frac{2}{3} \frac{r_e L_W}{\lambda_W^2} K_W^2 m c^2 \gamma^2, \qquad \lambda_W = \lambda_W / (2\pi)$$

• Photonの平均エネルギーは

$$\omega_{\gamma} \sim \frac{\lambda_e}{\lambda_W} \sqrt{1 + K_W^2} mc^2 \gamma^2$$

したがって平均Photon数は(αはfine str. Const.)

$$n_{\gamma} \sim \frac{\Delta E}{\omega_{\gamma}} \sim \frac{\alpha}{\sqrt{1 + K_W^2}} \frac{L_W}{\lambda_W}$$

- ・ ILCではエネルギー、KW の設定によるが、 $\Delta E^{3}$ GeV,  $\omega_{\gamma}^{2}$  30MeV,  $n_{\gamma}^{2}$  100くらい。
- これにより発生するenergy spreadは  $\Delta\sigma_E \sim \sqrt{n_\gamma}\omega_\gamma$
- Emittance, polarizationの変化は小さい

# Timing 問題

- 電子ビームを使って次の衝突用の陽電子を生成するために、陽電子軌道の全長に面倒な条件が加わる
- (  $L_4 + \Delta_1 + L_3$  )  $L_2 = n \times C_{DR}$



From Kuriki, BTR-DESY

- ・ 概数でいえば、IP ← → 図の右端 = n x (C<sub>DR</sub>/2)
- リナック長が閾を越えた場合、
  - リナック長をCDR/2=1.6km 延ばさなければならなくなる。
- ✓ あるいはDR周長を変える(設計段階で)。かなり連続的にできる。
   運転時の微調整は、
  - ✓ DR周長のオンライン制御で可能(現在、nは10程度)
  - ✓ シケインを陽電子ラインのどこかに挿入しておく

# 補助陽電子源

- Undulator法のばあい、電子側が 止まっていると、陽電子側はビー ムtuningもできない
- これを補うため補助陽電子源が必要
- Auxiliary sourceは栗木案を採用
  - 500MeV S-band 常伝導linacを用い る
  - 標的は、undulatorと共用
  - 0.4X<sub>0</sub>の厚みの場合、バンチ電荷2%
  - 可能なら3X。のタングステン標的と モザイクにする。この場合、~20%。
  - パルスあたり1バンチか。



# Damping RingへのTransport

- Spin flip
  - Capture→DRへの 5GeV lineで longitudinal→transv erse
  - Flipは超伝導ソレノ 🖲 イドの極性逆転 ×
  - 高速flip (5Hz) につ いては
    - 2ソレノイドの並行
       ラインがトンネルに
       入るか検討
    - 物理側の強い要求



- Remote handling
  - R&D体制を考える (標的システムの交換頻度が年1回くらいな ら不要か)

## **Damping Ring**

久保さん担当

- Damping Ringの役割
  - 与えられた時間(200ms、10Hz運転の場合 100ms)内に Emittanceの小さいビームをつくる
  - 全バンチ(ILCの場合最大~2600)を一時貯蔵する
- ・メカニズム
  - 平衡エミッタンスの小さい曲線部
  - ウィグラー磁石により
    - ・さらに平衡エミッタンスを下げ、かつ
    - ・ 減衰時間を短縮する

# **Damping Rings**

- 要求值
  - $-\gamma \varepsilon_x = 5.5 \ \mu m$ ,  $\gamma \varepsilon_y = 20 nm$
  - 減衰に使える時間は100ms
  - 第1段階1312 bunches、最大2625 bunches
  - bunch-by-bunch injection/extraction
- 一周~3km
- 第1段階では電子・陽電子各1リング
  - ✓ バンチ間隔~6ns
- 2625バンチに移る時点で、(必要 なら)陽電子1リングを追加する
  - electron cloud次第
  - 電子は1リングのまま。バン チ間隔3ns



# **Damping Ring Configuration**



#### **Injection/Extraction**

- バンチ数が多い(1312~2625)
- 線形加速器ではバンチ間距離が長い(600~300ns)
- これをそのまま貯蔵するには、一周が 2625 x 300ns x (3x10<sup>8</sup>m/s) = 240km のリングが必要
- したがって、バンチ間距離を圧縮して貯蔵する
- ・ 出し入れは1バンチずつ、高速キッカーで行う
- キッカーの速さがリングの大きさを決める。
- この技術は、ATFでのR&DでほぼOK
- これは超伝導colliderの弱点と思っていたが、キッカーが可能であるなら、 それほどでもない。CLICのdamping ringとのコストの差は小さい



# **Damping Ring Requirements**

Beam energy		5	GeV
Train repetition rate	5	ns	
Main linac bunch separation	554	ns	
Number of bunches per train		1312	
Buncg population		2.00E+10	
Injection requirements			
Normalized betatron amplitude (	(Ax+Ay)max	0.07	m.rad
Energy range (full)		75	MeV
Bunch length (full)	66	mm	
Extracted beam			
Normalized horizontal emittance	Э	5500	nm.rad
Normalized vertical emittance		20	nm.rad
Rms relative energy spread		0.11	%
Rms bunch length		6	mm
Maximum allowed transfer jitter		0.1	$σ_x$ , $σ_y$

## **Damping Ring Parameters**

		5Hz r	5Hz mode		10Hz mode	
		Low power	High lumi	positron	electron	
Circumference	km	3.2	3.238		3.238	
Number of bunches		1312	2625	1312		
Bunch population		2.00E+10	2.00E+10	2.00	E+10	
Maximum bunch current	mA	389	779	38	39	
Transverse damping time	ms	23.	95	12.86	17.5	
Longitudinal damping time	ms	1.	2	6.4	8.7	
Bunch length	mm	6.0	)2	6.02	6.01	
Momentum compaction facto	or	3.30E	E-04	3.30E-04	3.30E-04	
Normalized horizontal emittar	nce µm	5.	7	6.4 5.6		
Horizontal chromaticity		-5	1.3	-50.9	-51.3	
Vertical chromaticity		-43	3.3	-44.1	-43.3	
Wiggler firld	Т	1.5	51	2.16	1.81	
Number of wigglers		5	4	5	4	
Energy loss per turn	MeV	4.	5	8.4	6.19	
RF frequency	MHz	650 650		50		
Number of cavities		10	12	1	2	
Total voltage	MV	14		22	17.9	
Voltage per cavity	MV	1.4	1.17	1.83	1.49	
RF synchronous phase	deg	18.5		21.9	20.3	
Power per RF coupler	kW	176	294	272	200	

2014/7/19 ILC Camp Yokoya

# 電子雲不安定性

- CESR-TA finished
- Gave recommendation for the mitigation method (table below)
  - Arc and wiggler sections requires antichamber
  - Full power in 3.2km ring needs aggressive mitigation plan
- No significant difference between 6.4km with 2600 bunches and 3.2km with 1300 bunches

EC Working Group Baseline Mitigation Recommendation				
	Drift*	Dipole	Wiggler	Quadrupole*
Baseline Mitigation I	TiN Coating	Grooves with TiN coating	Clearing Electrodes	TiN Coating
Baseline Mitigation II	Solenoid Windings	Antechamber	Antechamber	
Alternate Mitigation	NEG Coating	TiN Coating	Grooves with TiN Coating	Clearing Electrodes or Grooves

ECLOUD`10 (October 13, 2010, Cornell University)

# **Damping Ring Vacuum Chamber**

- 陽電子リングでは、CESR-TA teamの推薦にしたがい下図のようにする
- 電子雲以外の不安定性はシリアスでない
- 電子リングでは、FII (Fast Ion Instability) がもっとも重要



## **RTML (Ring To Main Linac)**

久保さん担当



- 減衰リングからリナックへのビームの輸送
- スピンの回転(spinを垂直方向から水平面内に回す。solenoid + bend + solenoid)
- Feedforward
- バンチ長の圧縮
- ビームの中途ダンプ

# Feedforward

- Turn around を利用して、バンチ位置のfeedforward ができる。
- Turn around に入る直前のバンチ位置を測定し、もどって来たときに補正する。
- とくに、減衰リングの取出しキッカーのfluctuationの結果をな おすことができる。



# <mark>バンチ</mark>圧縮

- 衝突点での砂時計効果を緩和するためにバンチを短くする。
- 加速空洞とシケインの組合せ
- Damping Ringでの平衡バンチ長は 6mm。これを 300 µm に 圧縮する。





- バンチ長を圧縮するとエネルギー幅が増加する。
   (longitudinal emittance の保存)
- △E/E が大きすぎるとエミッタンス増加などが起る。
- これを避けるために、bunch compressor は同時に加速もおこ なって、∆Eが増加しても、∆E/Eの増加が小さくなるように設 計する。
- 2段階圧縮(第 1圧縮のあとに 加速をいれて から再び圧縮 する)にすれ ば中間の∆E/E がさらに小さく なる



### **Double-Stage Compressor**

- バンチの長さを減衰リングでの6mmから、リナックでの300µm(1/20)に圧縮する (RDRでは9mm→300µm(1/30))
- ・ 加速・シケインの組合せ
- SB2009では1段で1/20にすることにしたが、TDRではRDRの2段式にもどす
- 2段式のほうが高価であるが、150µmまで圧縮できる性能がある。
  - ただし、標準パラメータは300μm
- 誤差の許容値も大きい。たとえばRF phase error toleranceは
  - correlated errors:  $\Delta \varphi \sim 0.16^{\circ} / 0.32^{\circ}$  SB2009/ RDR
  - uncorrelated errors:  $\Delta \phi \sim 0.40^{\circ} / 0.6^{\circ} SB2009 / RDR$



### 2014/7/19 ILC Camp Yokoya

#### Accept the range +/- 20% $-Q0 > 1xx10^{10}$ at 31.5MV/m

- Average operating gradient 31.5MV/m
- yield > 90% (Up to 2 surface treatment passes)

Main Linac

- Q0 > 0.8x10<sup>10</sup> at 35MV/m

- Accept cavities > 35 -20% = 28MV/m
- Average 35MV/m
- ~2/3 of the total cost Gradient at vertical test
- Key area of ILC

加速空洞 佐伯さん担当 STF 早野さん担当

# Main Linac Parameters

MAIN Linac RF Parameters		
Cavity (9-cell TESLA elliptical shape)		
Average accelerating gradient	31.5	MV/m
Q factor Q0	1.00E+10	
Effective length	1.038	m
R/Q	1036	Ω
Accepted operational gradient spread	+/-20	%
Cryomodule		
Total slot length	12.652	m
Type A	9 cavities	
Туре В	8 cvities	incl. 1 SC quad
ML unit	A+B+A	
Number of units (e+/e-)	282/285	
Total component counts		
Cryomodule type A	564/570	
Cryomodule type B	282/285	
9-cell cavities	7332/7410	
SC quad	282/285	
Total linac length (flat site)	11027/11141	m
Total linac length (mountain site)	11072/11188	m
Effective average accelerating grad	21.3	MV/m
RF requirements (for average gradient)		
Beam current	5.8	mA
beam (peak) power per cavity	190	kW
Matched loaded Q (QL)	5.40E+06	
Cavity fill time	924	μs
Beam pulse length	727	μs
Total RF pulse length	1650	μs
RF-to-beam power efficiency	44	%

#### **Progress in SCRF Cavity Gradient**





Production yield: 94 % at > 28 MV/m,

Average gradient: 37.1 MV/m

reached (2012)

A. Yamamoto, May2013, ECFA13



Test Results for the Testing of 800 Series Cavities for the European XFEL

#### XFEL Yield of gradients: After 1. re-treatment (2. pass)

- Yield of usable and maximum gradient of ~207 cavities (2.pass) => 85% (cavities that passed in 1. pass + results of cavities after re-treatment)
- Average gradients increased + spread reduced



# **Acceleration Test**

- Confirm the gradient in modules (design margin: 10% from VT)
- At full spec with beam
- Energy stability, within a pulse, pulse-to-pulse
- Phase stability in vector sum
- Operational margin, klystron near saturation





#### **SCRF Beam Acceleration Test**

#### **DESY: FLASH**

- SRF-CM string + Beam,
  - ACC7/PXFEL1 < 32 MV/m >
- 9 mA beam, 2009
- 800μs, 4.5mA beam, 2012
   KEK: STF
- S1-Global: complete, 2010
  - Cavity string : < 26 MV/m>
- Quantum Beam : 6.7 mA, 1 ms,
- CM1 & beam, 2014 ~2015
- FNAL: NML/ASTA
- CM1 test complete
- CM2 operation, in 2013
- CM2 + Beam, 2013 ~ 2014













A.Yamamoto, Higgs Hunting 2013

#### **FLASH** layout





315 m



A.Yamamoto, Higgs Hunting 2013

#### FLASH 9mA Expt achievements: 2009-mid 2012

#### High beam power and long bunch-trains (Sept 2009)

Metric	ILC Goal	Achieved	
Macro-pulse current	9mA	9mA	
Bunches per pulse	2400x 3nC (3MHz)	1800x 3nC 2400 x 2nC	
Cavities operating at high gradients, close to quench	31.5MV/m +/-20%	4 cavities > 30MV/m	

#### Gradient operating margins (Feb 2012)

Metric	ILC Goal	Achieved
Cavity gradient flatness (all cavities in vector sum)	2% ΔV/V ( <mark>800μs, 5.8mA)</mark> (800μs, 9mA)	<0.3% ∆V/V (800µs, 4.5mA First tests of automation for Pk/QI contro
Gradient operating margin	All cavities operating within 3% of quench limits	Some cavities within ~5% of quench (800us 4.5mA First tests of operations strategies for gradients close to quench
Energy Stability	0.1% rmsat 250GeV	<0.15% p-p (0.4ms <0.02% rms(5Hz

### A recent result at FNAL Performance to Date - Gradient





### **Linac Beam Dynamics**

• Main linac alignment tolerances







- BDSの役割は最終的にはビームを衝突点で絞ることであるが、それ以外に多数の装置が並んでいる
- Machine Protection System(これはundulatorより上流)
- Tune-up/emergency dump
- Collimator
- Beam diagnostics section (beam energy, emittance, polarization)
- Muon absorber
- Crab cavity
- Feedback system
- Main beam dump

色収差

- 最後の4極磁石から焦点(s=0)までの距離をLとする。
- p=p<sub>0</sub>の粒子はこの点で絞られている。
- $p=p_0(1+\delta)$ の粒子は、4極磁石から L(1+\delta) あたりに焦点がくる。 この焦点は、s=0 から L $\delta$  だけずれているから、そこでのベータ関数は

$$\beta = \beta_0 + \frac{(L\delta)^2}{\beta_0} = \beta_0 \left[ 1 + \left( \frac{L\delta}{\beta_0} \right)^2 \right]$$

• したがって色収差の目安は





- 通常のリングでは次のように補正する
- ・ 4極磁石の磁場は、  $B_{quad} = a(xe_y + ye_x)$
- 運動量 $p=p_0(1+\delta)$ の粒子にとっては、effectiveに

$$\frac{B_{quad}}{1+\delta} = a(x\boldsymbol{e}_y + y\boldsymbol{e}_x) - a\delta(x\boldsymbol{e}_y + y\boldsymbol{e}_x)$$

- この第2項が色収差である。
- ・ 6極磁石の磁場は、  $\boldsymbol{B}_{sext} = b\left[(x^2 y^2)\boldsymbol{e}_y + 2xy\boldsymbol{e}_x\right]$
- Dispersion η<sub>x</sub>のある場所なら、運動量p=p<sub>0</sub>(1+δ)の粒子は η<sub>x</sub>δだけx座標がずれ るから

$$B_{sext} = b \left[ \left( (x + \eta \delta)^2 - y^2 \right) \mathbf{e}_y + 2(x + \eta \delta) y \mathbf{e}_x \right] \\ = \delta i \subset 無関係な項 + 2b\eta \delta (x \mathbf{e}_y + y \mathbf{e}_x) + \delta^2 \mathcal{O} \mathfrak{I}$$

- したがって、4極磁石と6極磁石をほとんど同じ場所におき、かつ bη=a/2 として おけば、δの項が消せる
- ただし、6極磁石のためにx,yの非線形項(上のδに無関係な項)が現れる

#### **Local Chromaticity Correction**

 現在のILCの設計では、dispersion関数のゼロでない場所に、4極磁石と6 極磁石を並べて置き、その場で色収差を消す方法をとっている(つまり、 通常の方法)。



- 右側の6極磁石の組は、Final Doublet (最後の2つの4極磁石)が作る色 収差を消す。
- ・ 左側の6極磁石の組は、右側の組がつくった非線形性を相殺する目的で 置かれている。
- この方式は ATF2 で採用されている
- IPでdispersion η<sub>x</sub> は消えるが、その微分 η<sub>x</sub>' は残る

#### **FF Optics**



Single IR BDS optics (2006e)

# **Final Doublet**

- Final doublet
  - Under study at BNL
  - Split QD0 (2m) into 2 pieces
  - Easier mechanical support
  - Flexibility for low energy optics

- QD0 Jitter
  - Simulation by White below
  - Shows average, 10%, 90% CL
  - − Luminosity loss 1%
     → jitter < 50nm rms</li>



## **IP Feedback**

- Bunch interval is long enough for intra-train digital feedback
  - Advantage of SC collider
- Large disruption parameter
  - Dy = 25





#### MPS (Machine Protection System)

- Main linacはエネルギーずれ20%のビームでも通せるが、BDSの許容幅は極めて小さい
  - ML aperture 70mm
  - Undulator aperture 6mm
  - BDS aperture 20mm (collimator ~1mm)
- Main linacのなんらかのトラブルでエ ネルギーの大きく異なるビームが BDSに入るとmachine/detectorをこわ す可能性がある
- これを止めるために、undulatorの上
   流にMPSを置く
- シケインとBPM (Beam Position Monitor)によりそのようなバンチを検 出して、後続のバンチをfast kickerで 蹴りだす


### **Muon Wall**

- Collimatorに衝突した粒子の一部はmuonを発生する
- これはほとんどとまらずにdetectorに達する

- これを阻止するために、トンネル断面をほとんど覆う磁化した鉄を使う
- IPから350m
- ~1.5Tesla.
- 5m(19mまで延長可)



### **Beam Dump**

- Main dumpは4カ所、いずれも最大18MW。これは1TeV運転 を見越している。
- ステンレス容器、直径1.8m、長さ11m (10X<sub>0</sub>)
- 高圧水(10気圧)で沸点を上げる



### **Crab Crossing**

- 実験へのbackgroundをさける ため、ILCでは14 mradの交差 角をつける
- ・ 14mrad >>  $\sigma_x / \sigma_z$  であるためこ のままではluminosityがほとん どなくなる
- ILCではcrab crossingは必須
- IPから13.4m
- 電子・陽電子側のクラブ空洞のタイミング誤差の許容値がきびしい





3.9GHz prototype(実物は9セル)



### **Traveling Focus**

- β<sub>v</sub><<σ<sub>z</sub>ではhour-glassが厳しい
- 焦点の位置に収束レンズがあれば拡がり を抑えられる
- 相手のビームをレンズとして使える
- Dy が大きくないと効果が薄い
- ただし、相手のビームは動いている
  - 相手ビームの頭と遭遇する位置を焦点とす ればよい
  - バンチの先端と後端で焦点の位置を変える
- 方法
  - crab cavity + sextupole magnet
  - Energy slope + chromaticity
  - 後者は energy spreadが大きくなりすぎて、
     色収差補正・重心系エネルギーのひろがり などのもんだがある
- 欠点
  - crab cavityのわずかな誤差が問題
  - このため標準パラメータにはしない
     (しかし、crab空洞だけで、ほとんどタダでできるので、運転時にかんがえればよい)

Travelling Focus  $\beta^* < \sigma_z$ 

### Waist Shift

- 相手ビームの頭付近に焦点を作れば、焦点 位置をバンチ上位置とともに動かさなくても、 かなりの効果がある
- ・
   焦点をnominal interaction pointの手前に置く
- ILCのパラメータの場合、0.8 σ<sub>z</sub> あたりが最適
- Official parameter setではこれを採用

#### Luminosity Enhancement by Waist Shift (B1b)

- Maximum around  $\Delta s=0.8\sigma_z$
- 15% for L, 12% for L(1%) to be compared with ~20% by TF
- No change in beamstrahlung
- No change in pair angle (pair angle comes from Coulomb tail)

この図は2625バンチとして いる。TDR 1TeVでは2450バ ンチなので、6.6%ほど下げ る



#### **Pair Creation**

- 衝突中に次のような過程で電子・陽電子対が発生する  $\gamma + \gamma \rightarrow e^+ + e^-$  (Breit-Wheeler process)  $e^{\pm} + \gamma \rightarrow e^{\pm} + e^+ + e^-$  (Bethe-Heitler process)  $e^+ + e^- \rightarrow e^+ + e^- + e^+ + e^-$  (Landau-Lifshitz process) (左のgは、beamstrahlungの光子)
- 数は バンチ衝突あたり 105~106 程度
- この対のうち、電荷の符号が相手の粒子と同符号のものは クーロン力ではじかれ、大きな角度で飛出すので、 background noise の原因になる。



### **Out-coming Angle of Pairs**

- 対粒子のエネルギー  $\varepsilon E_0$  ( $\varepsilon \ll 1$ )
- 対向ビームと同符号の電荷とする
- 出射角は、水平方向・鉛直方向ほぼ同じ
- 粗い近似で

$$\theta \sim \left[\frac{\log(4\sqrt{3}D_x/\varepsilon)}{\sqrt{3}\varepsilon D_x}\right]^{1/2} \frac{2Nr_e}{\gamma(\sigma_x + \sigma_y)}$$
$$D_x = \frac{2Nr_e}{\gamma} \frac{\sigma_z}{\sigma_x(\sigma_x + \sigma_y)}$$

- 対数因子を無視すると  $\theta \propto \left[\frac{2Nr_e}{\gamma \varepsilon \sigma_z}\right]^{1/2} \Rightarrow p_T \propto \sqrt{\varepsilon}$
- これはほとんど線電荷密度 N/σ<sub>z</sub> できまり、transverse sizeによらない

## Pair Angle分布の例



2014/7/19 ILC Camp Yokoya

### Oide Limit

 最後の4極磁石中で のsynchrotron輻射に より焦点がぼやける

$$(\sigma^*)^2 = \epsilon_g \beta^* + C(\epsilon_g/\beta^*)^{5/2}$$

C: 収束系の詳細によるパラメータ

$$\sigma_{min}^* = \text{const} \times C^{1/7} \epsilon_g^{5/7}$$

- ほとんどC (つまり収束系の設計)によらない
- ILCではほとんど効かないが、CLICでは重要

### Luminosity Upgrade

- Baseline (1326 bunches)
  - E<sub>CM</sub>=250GeVでは、全体の繰返しを上げて、Luminosityを倍にすることが可能
    - Collision rate 10Hz ---- detectorの用意が要る
  - E<sub>CM</sub>=500GeVでは、電力が不足する
  - E<sub>CM</sub>=350GeVでは、7Hzくらいまで可能
- High power (2625 bunches)
  - RF system 増強、および e-cloud の状況によっては positron DR の追加が必要
  - E<sub>CM</sub>=250~500GeVにわたってLuminosity倍増が可能

#### Luminosity (x10<sup>34</sup> /cm<sup>2</sup>/s)

	#of bunches	Collison freq.	250GeV	350GeV	500GeV
Baseline	1312	5	0.75	1.0	1.8
		10(7)	1.5	(1.4)	
Hi power	2625	5	1.5	2.0	3.6
		10(7)	3.0	(2.8)	

# **Higgs Factories**

### **Possible Higgs Factories**

- e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> LC
  - ILC
  - CLIC
  - NLC/GLC-type (klystron-based normal-conducting LC)
- e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> Ring Colliders
  - Ring Colliders
    - FCCee, SuperTRISTAN, FNAL site filler, CEPC, .....
- μ<sup>+</sup>μ<sup>-</sup> Collider
- γ-γ Collider
  - SC Linac-based
    - ILC-based
    - Recirculating linac
    - ERL based
  - NC Linac-based
    - CLIC-based
    - NLC/GLC-type
    - SLC-type

### Revival of e+e- Ring Colliders ?

- To create Higgs by e+e-  $\rightarrow$  ZH requires E<sub>CM</sub>~240GeV
- This is not too high compared with the final energy 209GeV at LEP



#### 2 Aspects of Synchrotron Radiation Loss

• Energy loss by individual particles must be compensated for

$$U = 0.088 \frac{E^4 [\text{GeV}]}{\rho[\text{m}]} \quad [\text{MeV}]$$

- This (almost) determines RF voltage per turn
  - ~7GeV in LEP tunnel
  - Still possible owing to the improvement of superconducting cavity technology
- But, to get required electric power, you must multiply the beam current
  - Real limitation comes from the wall-plug power
  - Reduce the beam current
  - Small beam size for high luminosity

#### Beamstrahlung による e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> Ring Colliderの限界

 Beamstrahlung の high-energy tail は電子・陽電子のおお きなエネルギー損失をもたらす

$$\Upsilon_{max} \approx \frac{2Nr_e^2\gamma}{\alpha\sigma_z(\sigma_x + \sigma_y)}$$
$$\frac{dW}{d\omega} \propto \exp\left[-\frac{2\omega}{3\Upsilon(E_e - \omega)}\right]$$

- 損失の大きい粒子は周回運動を続けられない (momentum band-width)
- ビーム寿命に影響
  - Top-up ringが必要
- したがって、ring colliderはLCよりもbeamstrahlungに対して弱い



## Ring e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> Colliderの(宣伝されている)利点

- 240GeV (TLEP-H) でのluminosity は、ILCよりずっと高い(衝突点1つでも)
  - 10<sup>36</sup> cm<sup>-2</sup>s<sup>-1</sup> at Z-pole (TLEP-Z)
- ・ t-tbar threshold (TLEP-t)でのluminosity はILCなみ
- 複数の IPが可能 (often use 4)
- 十分経験済の技術
  - Luminosity for sure
  - TDR soon
- ・ ILCより安い

Used to be said "~half of ILC?"

トンネルは 100TeV程度までのppに再利用できる

		CEPC	FCCee IPAC14				
		2014Jun ICHEP	Z	Z(crab w.	W	н	t
Top Level Parameters							
Energy (center of mass)	GeV	240	91	90	160	240	350
Luminosity (per IP)	$10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{ s}^{-1}$	1.77	28	219	12	6	1.7
No. of IP		2	4	4	4	4	4
Size (length or circumference)	km	50	100	100	100	100	100
Other Important Parameters							
Bending radius	km	6.2	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4
Ne	10 <sup>10</sup> per bunch	35.2	18	10	7	4.6	14
nb (number of bunches) per beam		50	16700	29791	4490	1360	98
I(beam)	mA	16.9	1450	1431	152	30	6.6
ΔE(synch)	GeV/turn		0.036	0.035	0.348	1.76	7.98
P(synch) per beam	MW	50	50	50	50	50	50
Critical energy of synch. rad.	MeV	0.62	0.02	0.02	0.11	0.37	1.14
ɛx,n	mm-mrad	1620	2582	12	517	221	685
εy,n	mm-mrad	4.93	5.34	0.09	1.10	0.47	0.68
εx,g	nm	6.9	29	0.14	3.3	0.94	2
εy,g	nm	0.021	0.06	0.001	0.007	0.002	0.002
beta x IP	mm	800	500	500	500	500	1000
beta_y IP	mm	1.2	1	1	1	1	1
σχ, ΙΡ	nm	74300	121000	8000	26000	22000	45000
σу, IP	nm	160	250	32	130	44	45
σz, IP	mm	2.12	1.64	1.9	1.01	0.81	1.16
sigma E, IP	%	0.13	0.04	0.04	0.07	0.1	0.14
σz, IP (incl.beamstr)	mm	2.42	2.56	6.4	1.49	1.17	1.49
sigma E, IP (incl.beamstr)	%	0.150	0.06	0.12	0.09	0.14	0.19
Full crossing angle	mrad	0	0	30	0	0	0
Beam lifetime due to radiative Bhabha	sec	3238.8	17220	2280	4320	1800	1380
b−b tune shift x		0.097	0.031	0.032	0.06	0.093	0.092
b−b tune shift y		0.069	0.03	0.175	0.059	0.093	0.092
Longitudinal damping time	turns	40	1320	1338	243	72	23
RF frequency	GHz	0.70	0.8	0.3	0.8	0.8	0.8
RF Voltage	GV	6.87	2.5	0.54	4	5.5	11
Momentum compaction		4.00E-05	1.80E-04	2.00E-05	2.00E-05	5.00E-06	5.00E-06
Synchrotron oscillation tune		0.196					
Natural polarization time	hour	0.335	240	254	14.3	1.88	0.286
Geometric Luminosity /IP (no hour-glass)	10 <sup>34</sup> cm <sup>-2</sup> s <sup>-1</sup>	2.486	42.7	2776	15.5	7.09	2.26
hour glass factor Camp Yokoya		0.704	0.64	0.94	0.79	0.8	<b>%</b> .73

## Ring e<sup>+</sup>e<sup>-</sup>の技術的課題(1)

- Optics
  - 低emittance
    - 最近の設計では、FCCeeは ε<sub>yg</sub>=2pm = LEP2の1/100
    - CEPC/t21pm
    - βy\* ~ 1mm のもとで大きなmomentum bandwidth (> 2%)
  - Saw-tooth effects
- Machine configuration
  - 2 collider rings (FCCee) or single ring with pretzel (CEPC)
  - RF sectionを2リングで共有する(FCCee, 日ghえねrgy)
  - Top-up ring はdetectorをbypass しなければならない



## TLEP技術的課題(2)

- Beam 力学
  - Beam-beam 相互作用
    - 複数IPの効果
    - 大きなhour-glass因子( $\beta_v$ =1mm,  $\sigma_z$ =1-2mm)
    - ・ 速い synchrotron 振動(FCCee at tt 0.7, CEPC 0.2)
  - 長い RF section (~600m)に起因する不安定性 (特に FCCEE at Zpole)
- RF
  - power coupler (CW)
    - >100MW into 600m cavity section
    - 1.3GHz は無理。700MHz ならOKか。Need R&D. FCCeeは400MHz?
    - ・ CEPCは700MHz
- 真空
  - Synchrotron radiation のシールド
    - critical energy ~1.5MeV → neutronの発生
    - ・ C=100kmの結果critical energy ~1.1MeV に緩和

## Configuration of Collider Ring(s)



#### Ring e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> Colliderでのビーム偏極

#### 偏極の用途

- A) Beam energy calibration (LEPで △M<sub>z</sub>~2MeVの実績)
- B) Polarized colliding beam experiment
- Sokolov-Ternovの自発偏極
  - 偏極時間は、FCCee at Zpoleで、τ<sub>pol</sub>=240時間 (propto. ρ³/E⁵)、Wpair thresholdで14 時間
  - ビームエネルギー幅(E<sup>2</sup>/sqrt(p)に比例)が、スピン共鳴間隔0.44GeV (=mc<sup>2</sup>/a)に比べて無視できなくなると、depolarizationが起こる。Wpair thresholdでギリギリ。Higgs 領域では偏極不可能。
- A)のためには、pilot bunchesが使える
  - 偏極度は~5%でよい。
  - Pilot bunchesは衝突しないので寿命が長く、自然偏極時間近くまでもつ。したがって、
     ΔM<sub>z</sub>の改善は有力。
     ΔM<sub>w</sub>はエネルギー幅のためギリギリ。
  - ただし、到達精度は??
  - Pilot bunchesとcollding bunchesのエネルギー差?ビームエネルギー幅の~1/100ま でできるか?この精度ではcollding bunchesのエネルギー分布は多分非対称
- B)のためには、
  - Colliding bunchesの寿命(1時間程度以下)が偏極時間よりはるかに短いので、
     polarization wigglerが必要
  - ー しかし、偏極時間を1/100にすると、1粒子のシンクロトロン輻射が100倍になる
  - ー さらに、スピンをlongitudinalに回転しなければならない
  - したがって、B)はZ-poleでも望み薄





#### Power consumption for TLEP at 175 GeV (MW)

201	3年4月のもの。新しい評価がない		TLEP
	Wall-plug RF power		218 <sup>(1)</sup> [181 w/o RF feedback]
	RF cryo power Magnet system power		24 (2)
			6 <sup>(3)</sup>
	Cooling and ventilation		60 (4)
	Experiments		25 <sup>(5)</sup>
	General services		15 <sup>(5)</sup>
	SPS & PS as pre-injectors (20 & 3.5 Ge	eV)	5 <sup>(6)</sup>
	e-/e+ source & pre-pre-injector Total		1 <sup>(7)</sup>
			<b>354</b> [318 w/o RF feedback]

(1): wall power efficiency: power converters: 95%; klystron efficiency: 65%; transmission losses 7%; overall 55% (from the LHeC design report); includes 36 MW for RF feedback margin (which may not be necessary)

(2): 60% of LHeC ; cryo power depends on cavity  $Q_0$  (34 kW at 2 K for 1200 cavities with  $Q_0$  =2.5e10)

- (3): from LHeC ring-ring magnet design; power for 1 magnet (5.4 m, 0.075 T) = 270 W; assuming 2x80 km of magnets at 0.065 T (dipole field for 175 GeV beam energy)
- (4): TLEP three times more than LHC; maximum capacity for LEP

(5): as for LHC (see appendix)

(6): conservative estimate scaled from higher-energy proton operation

(7): L. Rinolfi, private communication

TLEP WS, Apr.2013

Mike Koratzinos<sup>9</sup> & F.Z.

#### TLEP cost breakdown – extremely rough (GEuro)

	TLEP
Bare tunnel	3.1 <sup>(1)</sup>
Services & Additional infrastructure (electricity, cooling, ventilation, service cavern, RP, surface structure, access roads)	by anybouy
RF system	1.0 <sup>(3)</sup>
Cryo system	1.0 (4)
Vacuum system & KP	0.5 <sup>(5)</sup>
Dagnet system for collider & injector ring	0.8 <sup>(6)</sup>
Pre-injector complex SPS reinforcements	0.5
Total	7.9
(1): J. Osborne, Amrup study	

- (2): very rough guess, conservative escalated extrapolation from LEP
- (3): B. Rimmer, SRF cost per GeV or per Watt for CEBAF upgrade, 2010
- (4): <sup>1</sup>/<sub>2</sub> LHC system [also, possibly some refurbished LHC plants could be reused]
- (5): factor 2.5 higher than KEK (K. Oide) estimate for 80 km ring

(6): 24,000 magnets for collider & injector; cost per magnet 30 kCHF (LHeC); 10% added;

no cost saving from mass production assumed <sup>2014/7/19</sup> ILC Camp Yokoya *Note: detector costs not included* 

Zimmermann, TLEP WS, Apr.20137

#### FCC global design study – time line



#### tentative time line



### Tentative time line

Zimmermann, TLEP WS, Apr.2013



Y.Wang, FCC kickoff 2014FeB

## Timeline (dream)

#### • CPEC

- Pre-study, R&D and preparation work
  - Pre-study: 2013-15
    - Pre-CDR by the end of 2014 for R&D funding request
  - R&D: 2016-2020
    - Approaching the Chinese government in 2015 for R&D funding (next 5-year planning: 2016-2020)
  - Engineering Design: 2015-2020
- Construction: 2021-2027
- Data taking: 2028-2035

#### • SppC

- Pre-study, R&D and preparation work
  - Pre-study: 2013-2020
  - R&D: 2020-2030
  - Engineering Design: 2030-2035
- Construction: 2035-2042
- Data taking: 2042 -

### Muon Collider

- μの性質は電子・陽電子ときわめて相似している
- · e+e-でできることは、μ<sup>+</sup>μ<sup>-</sup>でもできる しかしμは200倍重い →円型加速器で高エネルギーまで加速可能
- μ<sup>+</sup>μ<sup>-</sup> collider は e+e- colliderよりずっとクリーン(beamstrahlung negligible)
- ただし muon decayからのbackground の問題あり
   しかし muon ビームは自然には存在しない
- antiprotonの場合のようにビーム冷却が必要
- "Ionization cooling" invented by Skrinsky-Parkhomchuk 1981, Neuffer 1983



Ionization cooling test at MICE

To be terminated (P5)?



102

## **Create and Cool Muon Beam**

- Hadron collisionでpionをつくり、 muonにdecayさせる
- Muons は静止系では 2µs で崩壊
   すばやい加速が必要
- 段階的計画
  - Higgs factory at  $E_{cm}$ =126GeV
  - Neutrino factory
  - TeV muon collider
- colliderまでは遠い





## Muon Collider as Higgs Factory

- s-channel Higgs production  $\mu^+ \mu^- \rightarrow H$ 
  - lowest energy Higgs factory
  - エネルギー幅数MeVのビーム
     もつくれる
- ただし TeV collider に必要なkey facilities のほとんどが、Higgs factory でも必要(冷却の最終 段階以外)
  - 数MW のProton driver
  - 数MW の標的
  - イオン化冷却
    - ~10<sup>6</sup> in 6D emittance, 10<sup>3</sup> in  $\epsilon_{\rm L}$  to ~1mm.rad
  - collider ring の問題 (muon decay, etc)
- 数10年のR&Dが必要
- ・ 安くはない





#### The Muon Accelerator Program Timeline

20	10	~20	20	~2030	
Muon Accelerator R&D Phase	MAP Feas Assessr Muon Ionization Experiment (N	sibility Ad nent Syste n Cooling //ICE)	vanced ems R&D	Indicates a data	ate when
Proton Driver Implementation (Project X @		Prcj X Ph I	Proj X Ph II	an informed o should be pos	
FNAL)	IDS-NF			Proj X Ph III & IV	
Intensity Frontier	RDR	oposed Muon Stor Facility (nSTO	age Ring RM)	At Fermilab, critica production could Phase II of Proj	I physics build on ect X
		Collide	<pre>/ Evolution to r Conceptual</pre>	Full Spec n Factory	
Energy Frontier		v → Tech	nnical Design	Collider Construction	on → m
2014/7/19 ILC Camp Yoko	va		M Palmer	MIT WS 2013Apr	105

### Muon Collider Concluding Remarks...

- The unique feature of muon accelerators is the ability to provide cutting edge performance on both the Intensity and Energy Frontiers
  - This is well-matched to the direction specified by the P5 panel for Fermilab
  - The possibilities for a staged approach make this particularly appealing in a time of constrained budgets
- World leading Intensity Frontier performance could be provided with a Neutrino Factory based on Project X Phase II
  - This would also provide the necessary foundation for a return to the Energy Frontier with a muon collider on U.S. soil
- A Muon Collider Higgs Factory
  - Would provide exquisite energy resolution to directly measure the width of the Higgs. This capability would be of crucial importance in the MSSM doublet scenario.

The first collider on the path to a multi-TeV Energy Frontier machine?

### Gamma-Gamma Collider

- ・電子・電子コライダーの衝突点直前に、レー
   ザー光を照射
- ・ 逆コンプトン散乱で高エネルギー光子を作り、 衝突させる
- ・陽電子は不要



### **Kinetics of gamma conversion**

- ・ 光子の最高エネルギー  $\omega = \frac{x}{1+x+\xi^2} E_e, \qquad x \equiv \frac{4E_e\omega_L}{m^2}$ ・ 電子の偏極 (longitudinal)は、 シャープな光子エネルギース ペクトルのために essential
- ・ 最適なレーザーは長 λ = λ<sub>0</sub> λ<sub>0</sub> = 1µm \* (E<sub>e</sub> /250GeV) (x=4.83に対応)
   - λ < λ<sub>0</sub>では対生成がおこる
   - λ > λ<sub>0</sub>では光子エネルギーが低くなる
   ・ 大部分の電子を光子に変換するために必要なレーザーの flush energy

0

0

0.2

0.6

0.4

0.8

1.0

 大部分の電子を光子に変換するために必要なレーザーの flush energy は数(5-10) ジュール (詳細は電子バンチ長に依る)
## Various Possibilities of yy Colliders

- e+e- linear collider (ILC, CLIC) γ-γ colliderにコンバートできる
- 80GeV e- on 80GeV e- converted by laser with x=4.83 gives 66GeV on 66 GeV γ-γ collider (lowest energy to produce H except muon collider)
- CLICHE (2003)



#### Gamma-Gamma General Status

- γ-γ 技術はまだ未成熟
  ->5年以上の R&Dが必要
- このため、速い時点の計画開始のために、低エ ネルギー γ-γ からスタートするのは現実的でない

need 100% confidence at the time of project approval

- 技術的にみれば ZH での e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> から始め、必要な ら後で γ-γ に移行すべき
  - importance of γ-γ must be evaluated before the construction of e+e- (possible constraints in IR, e.g., the crossing angle)

Yokoya, Arlington, Oct.2012

# (personal) Conclusions

- ILC/CLIC Higgs factory are obvious if 500GeV is feasible
  - cost and staging issues
  - CLIC has maturity problem for early start
- e<sup>+</sup>e<sup>-</sup> Ring Colliders
  - Technology not trivial
    - Good exercise of accelerator physics (till an LC starts)
  - LEP3 (27km, 240GeV) & TLEP (80km, 350GeV) are just at the border of feasibility
  - Can be a choice if higher energy with  $e^+e^-$  is not needed at all
- $\gamma$ - $\gamma$  Colliders
  - technology immature
  - good target as a second stage of linear colliders
- Those who are not satisfied with personal conclusions, go to FNAL

Yokoya, Arlington, Oct.2012

# Far Future of ILC

- Extension by high gradient SCRF
- CLIC technology
- Plasma accelerator

#### TeV Upgrade : From 500 to 1000 GeV



Snowmass 2005 baseline recommendation for TeV upgrade:  $G_{cavity} = 36 \text{ MV/m} \Rightarrow 9.6 \text{ km}$ (VT ≥ 40 MV/m)



Based on use of low-loss or reentrant cavity shapes

## CM Energy vs. Site Length

- Under the assumption
  - Scenario B (i.e., keep the 500GeV linac as the high energy part)
  - Available total site length L km
  - Operating gradient G MV/m (to be compared with 31.5 in the present design)
  - Assume the same packing factor
- Then, the final center-of-mass energy is Ecm = 500 + (L-31)\*(G/45)\*27.8 (GeV)
  - e.g., L=50km, G=31.5MV/m → 870GeV
    L=50km, G=45MV/m → 1030GeV
    L=67km, G=45MV/m → 1500 GeV
    L=67km, G=100MV/m → 2700 GeV
- This includes the margin ~1% for availability
- But does not take into account the possible increase of the BDS for Ecm>1TeV
  - Present design of BDS accepts 1TeV without increase of length
  - A minor point in increasing BDS length: laser-straight

#### A Local Problem at Kitakami

 Once the first stage machine is built, it is almost impossible to move the IP (interaction point) in later stages because of the crossing angle



- Asymmetric collider may be acceptable
  - Asymmetric accelerator
  - Asymmetric energy
  - Asymmetric energy can be avoided to some extent by moving all the old cavities in the south arm to the north at the time of upgrade





#### **CLIC (CERN Linear Collider)**



# CLICとILCのGeometryの違い

- Crossing Angle
  - ILC 14mrad
  - CLIC 20mrad (3TeV(こoptimize)
  - これは14mradでも多分なんとかなる(多少luminosity がおちるか)
- Linac tunnel
  - ILC geoid-following
  - CLIC laser straight
  - Synchrotron radiationはgeoidfollowingでも問題ない
  - BPMのcalibration error → 将来な
    んとかなるだろう



#### CLICとILCのGeometryの違い(2) Undulatorの後のdogleg

- TDR設計ではundulatorの後、photonとelectronを分離するために、 doglegにより2mのoffsetを作っている
- この部分でのシンクロトロン輻射により、horizontal (normalized) emittanceが DRの値より 8%\*(E<sub>CM</sub>/1TeV)<sup>6</sup>だけ増加する(久保)。 1.5TeVではほとんど100%になる。
- CLICのように小さいhorizontal emittanceの場合は、1TeVでも問題 あり。
- このdoglegをなくしてまっすぐ伸ばすと、衝突点が100m以上 (2m/0.014rad)longitudinalにずれてしまう。



#### CLICとILCのGeometryの違い(2) Undulatorの後のdogleg (continued)

- 遠い将来>1TeVを考えるなら、このdoglegによるoffsetを、もうひとつのdoglegで もとに戻す必要がある
- トンネル長~400m 増加。ビームライン+トンネルで~30M\$ くらいか。
- >1TeVではundulatorをとりはずして、まっすぐにする
- その場合、positronは別のところで作る



- このdoglegは、linacの直後(undulatorの前)におくことも可能
- この場合、conventional positron sourceでスタートする際は、まっすぐでよい。コンクリート隔壁の位置が問題か?



#### **Plasma Accelerator**

- Linac in the past has been driven by microwave technology
- Plane wave in vacuum cannot accelerate beams: needs material to make boundary condition
- Breakdown at high gradient
  - binding energy of matter: eV/angstrom = 10GeV/m
- Need not worry about breakdown with plasma – can reach > 10GeV/m

#### **Plasma Wave**

- Plasma is a mixture of free electrons and nucleus (ions), normally neutral
- By perturbation, electrons are easily moved while nuclei are almost sitting, density modulation created.
- The restoring force generates plasma wave
- Charged particles on the density slope are accelerated, like surfing.
- Plasma oscillation frequency and wavelength are given by

$$\omega_p = \sqrt{\frac{e^2}{\epsilon_0 m_e}} n_0, \qquad \lambda_p = \frac{2\pi c}{\omega_p} = \frac{3.3 \times 10^4}{\sqrt{n_e [\text{cm}^{-3}]}} \quad \text{[m]}$$
$$n_e = \text{plasma density}$$



#### How to Generate Plasma Wave

- PWFA (Plasma Wakefield Accelerator)
  - Use particle (normally electron) beam of short bunch
- LWFA (Laser Wakefield Accelerator)
  - Use ultra-short laser beam
- In both cases the driving beam
  - determines the phase velocity of plasma wave, which must be close to the velocity of light
  - must be shorter than the plasma wavelength required
  - can also ionize neutral gas to create plasma

#### **LWFA**

- laser pulse length ← plasma wave wavelength ← plasma density
- Laser intensity characterized by the parameter a<sub>0</sub>
  - $-a_0 < 1$ : linear regime
  - $-a_0 > 1$ : blow-out regime

 $a_0 \approx 8.5 \times 10^{-10} \lambda_L [\mu \text{m}] I^{1/2} [\text{W/cm}^2]$ 

• Accelerating field

$$E = E_0 \frac{a_0^2/2}{\sqrt{1 + a_0^2/2}}$$
$$E_0 = cm_e \omega_p / e = 96 n_0^{1/2} [\text{cm}^{-3}]$$

# **Blowout and Linear Regime**

- The gradient can be higher in the blowout regime but
  - difficult to accelerate positron
  - very narrow
    region of
    acceleration
    and focusing

transve rse field

plasma

density

field

Figure from ICFA Beamdynamics News Letter 56



## Limitation by Single Stage

- Laser must be kept focused (Rayleigh length)
  - solved by self-focusing and/or preformed plasma channel
- Dephasing: laser velocity in plasma
  - longitudinal plasma density control
- Eventually limited by depletion
  - depletion length proportional to  $n_0^{-3/2}$
  - acceleration by one stage proportional to  $I/n_0$
- Multiple stages needed for high energy, introducing issues
  - phase control
  - electron orbit matching

#### **Concept of LWFA Collider**



#### Example Beam Parameters of 1/10TeV Collider

Case: CoM Energy	1 TeV	1 TeV	10 TeV	10 TeV
(Plasma density)	$(10^{17} \mathrm{cm}^{-3})$	$(2 \times 10^{15} \text{ cm}^{-3})$	$(10^{17} \mathrm{cm}^{-3})$	$(2 \times 10^{15} \text{ cm}^{-3})$
Energy per beam (TeV)	0.5	0.5	5	5
Luminosity $(10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{s}^{-1})$	2	2	200	200
Electrons per bunch (×10 <sup>10</sup> )	0.4	2.8	0.4	2.8
Bunch repetition rate (kHz)	15	0.3	15	0.3
Horizontal emittance $\gamma \varepsilon_x$ (nm-rad)	100	100	50	50
Vertical emittance $\gamma \varepsilon_{\nu}$ (nm-rad)	100	100	50	50
β* (mm)	1	1	0.2	0.2
Horizontal beam size at IP $\sigma_x^*$ (nm)	10	10	1	1
Vertical beam size at IP $\sigma_y^*$ (nm)	10	10	1	1
Disruption parameter	0.12	5.6	1.2	56
Bunch length $\sigma_z$ (µm)	1	7	1	7
Beamstrahlung parameter $\Upsilon$	180	180	18,000	18,000
Beamstrahlung photons per e, $n_{\gamma}$	1.4	10	3.2	22
Beamstrahlung energy loss $\delta_E$ (%)	42	100	95	100
Accelerating gradient (GV/m)	10	1.4	10	1.4
Average beam power (MW)	5	0.7	50	7
Wall plug to beam efficiency (%)	6	6	10	10
One linac length (km)	0.1	0.5	1.0	5

From ICFA Beamdynamics News Letter 56

#### Example Laser Parameters of 1/10TeV Collider

Case: CoM Energy	1 TeV	1 TeV	10 TeV	10 TeV
(Plasma density)	$(10^{17} \mathrm{cm}^{-3})$	$(2 \times 10^{15} \text{ cm}^{-3})$	$(10^{17} \mathrm{cm}^{-3})$	$(2 \times 10^{15} \text{ cm}^{-3})$
Wavelength (µm)	1	1	1	1
Pulse energy/stage (kJ)	0.032	11	0.032	11
Pulse length (ps)	0.056	0.4	0.056	0.4
Repetition rate (kHz)	15	0.3	15	0.3
Peak power (PW)	0.24	12	0.24	12
Average laser power/stage (MW)	0.48	3.4	0.48	3.4
Energy gain/stage (GeV)	10	500	10	500
Stage length [LPA + in-coupling] (m)	2	500	2	500
Number of stages (one linac)	50	1	500	10
Total laser power (MW)	48	3.4	480	34
Total wall power (MW)	160	23	960	138
Laser to beam efficiency (%) [laser to wake 50% + wake to beam 40%]	20	20	20	20
Wall plug to laser efficiency (%)	30	30	50	50
Laser spot rms radius (µm)	69	490	69	490
Laser intensity (W/cm <sup>2</sup> )	$3 \times 10^{18}$	$3 \times 10^{18}$	$3 \times 10^{18}$	$3 \times 10^{18}$
Laser strength parameter $a_0$	1.5	1.5	1.5	1.5
Plasma density (cm <sup>-3</sup> ), with tapering	10 <sup>17</sup>	$2 \times 10^{15}$	10 <sup>17</sup>	$2 \times 10^{15}$
Plasma wavelength (mm)	0.1	0.75	0.1	0.75

From ICFA Beamdynamics News Letter 56

#### What's Needed for Plasma Collider

- High rep rate, high power laser
- Beam quality
  - Small energy spread << 1%</li>
  - emittance preservation
- High power efficiency from wall-plug to beam
  - − Wall-plug → laser
  - − Laser  $\rightarrow$  plasma wave
  - − plasma wave  $\rightarrow$  beam
- Staging
  - laser phase
  - beam optics matching
- Very high component reliability
- Low cost per GeV
- Colliders need all these, but other applications need only some of these
- Application of plasma accelerators (not for colliders) would start long before all these requirements are established

#### Novel concept of a beam driven PWFA Linear Collider : A 2.5km HIGGS Factory (250m acceleration)



# An alternative ILC upgrade by PWFA from 250GeV to 1 TeV and beyond?



#### One possible scenario could be:

- 1) Build & operate the ILC as presently proposed up to 250 GeV (125 GeV/beam): total extension 21km
- 2) Develop the PFWA technology in the meantime (up to 2025?)
- 3) When ILC upgrade requested by Physics (say up to 1 TeV), decide for ILC or PWFA technology:
- 4) Do not extend the ILC tunnel but remove latest 400m of ILC linac (beam energy reduced by 8 GeV)
- 5) Reuse removed ILC structures for PWFA SC drive beam accelerating linac (25 GeV, 500m@19MV/m)
- 6) Install a bunch length compressor and 16 plasma cells in latest part of each linac in the same tunnel for a 375+8 GeV PWFA beam acceleration (382m) J-P. Delahaye, MIT mtg
- 7) Reuse the return loop of the ILC main beam as return loop of the PWFA drive bear